

第 19 回東川賞審査講評

海外作家賞	ガイ・ティリム氏 (Guy TILLIM)
国内作家賞	齋藤亮一氏 (さいとう・りょういち)
新人作家賞	糸崎公朗氏 (いとざき・きみお)
特別作家賞	吉田ルイ子氏 (よしだ・るいこ)

第 19 回目を迎えた本年度の東川賞の審査会は、去る 3 月 13 日、東京都写真美術館の研修室を会場として、例年通り全国のノミネーターにより推挙された候補作品及びその資料を取り揃えて行われた。集められた作品資料を概観すると、近年の出版不況を反映し、その数量は以前よりは減少の傾向にある。しかし写真集として上梓された作品群は、この困難な時代に敢えて出版に漕ぎ着けただけの重みを持つものも複数あり、いわば少数精鋭のせめぎ合いといった感がある。

今年の海外賞だが、本賞も回を重ねること 20 回にあと 1 回というところまで来て、既に世界の主要な地域を網羅してきた。だが唯一アフリカ大陸とその諸国からの選出は果たされていなかった。この件は先年より東川賞審査会の課題となっており、すでに 2 年前より折りあるごとにアフリカ諸国の写真家活動についてヨーロッパの諸都市で情報収集を行ってきた。その結果、アフリカ諸国で自主的で実質的な写真活動がある程度実践されている国や地域は比較的少ないが、例えばフランスが旧宗主国だったマリ共和国では、世界中に名声を馳せたセイドウ・ケイタ (Seydou Keita) 氏に代表される、スタジオ・ポートレイトの文化が根付いていることなどは判明した。しかし、実質的にジャーナリズム、出版、ギャラリー展示等の写真活動の文化的展開のある国は、南アフリカ共和国のみといった事実も明らかになった。かくして本年の 2 月下旬から 3 月の初頭にかけて、審査委員会から平木が南アフリカ共和国へ渡航し、ヨハネスブルク、プレトリア、ケープタウン、ステレンボッシュ等の都市を巡り、現地のギャラリー・オーナーや、ジャーナリスト、大学で写真を専攻する学者らの協力を得て資料を入手し、直に持ち帰り審査に供した。

その結果、今年の東川賞海外作家賞はケープタウンを活動の拠点としているフォトジャーナリスト、ガイ・ティリム (Guy Tillim) 氏と決定した。氏は、1962 年ヨハネスブルク生まれで、1986 年にプロとしての活動を開始して以来、つねにアフリカ、アジアの内戦や紛争地域を精力的に駆け巡り、15 年以上に亘ってフォトジャーナリズムの最前線に立ってきた。その間、南アフリカという国自体、アパルトヘイトの廃絶やネルソン・マンデラの登場といった歴史的で劇的な政治の大転換があり、白人であるこの写真家も同国民のひとりとして、人種差別の壁が取り払われ公正な社会と人種の共生が具現されてゆく社会を身をもって体験してきたわけである。今回の受賞対象となった近刊の写真集「Departure (出発)」は、西アフリカを始め、アフガニスタンなどのアジアをも含む、今、困難を抱えている地域の人間模様を淡々と綴った写真集で、アフリカやアジア諸国が、なぜ果てしなき戦乱の地でなければならないのかを、さりげなくも重い映像で問いかけてくる。しかし、タイトルが示すように、この厳しい現実を克服し、公正さと共生への希望を見出すための現実直視を促す作品集なのである。

国内作家賞は、かつて第 13 回東川賞で特別賞を受賞したこともある齋藤亮一氏と決定した。氏は 1959 年札幌生まれで、現在は東京で活躍する。氏は、若い日々スペインから西ヨーロッパ一帯を巡る旅から始め、その後東欧圏、そしてロシアやバルカン半島、またアジア、中米と広く旅を重ね、行く先々での人々との出会いやそれぞれの地方に色濃く残るノスタルジックで麗しい習俗や人間味を、優しくまた憂いに満ちたカメラアイで表現してきた。だが、近作は従来の作風とは趣を異にしていた。中国に取材した「Lost China」は、懐 (ゆか) しさや憂いといった感情よりも、まず今日の中国の現実とその迫力が活写されている。写真家のスタンスは、かつての旅と変わらないのかもしれないが、中国の庶民の暮らしを捉えたそのまなざしは、生の営みが脈々と続く場である都市の包容力を伝えてくれる。こうした仕事——見不可視な日常の蓄積を描くことこそ、写真という表現手段のひとつの本質を示すものと言えよう。40 歳代前半の今後大いに期待が持てる授賞である。

東川賞新人作家賞は、過去 19 回の本賞の歴史のなかでも、特筆すべきユニークな写真家に贈られる。その人物は、糸崎公朗氏で、1965 年長野県生まれの 38 歳。自ら結成した「非ユークリッド写真連盟」なるグループを主宰、約 10 年前の 1993 年頃から、主にギャラリーで作品発表を重ねてきた。というのも、糸崎作品は、「フォトモ」また「ツギラマ」という耳慣れない名称が添えられている写真を加工した立体作品で、出版よりも展示でその真価が発揮できる作品なのである。まず路上及び都市景観の観察の後に、街並みを多角的に写真で撮影、そして印画を作り、さらにその印画を切り抜いて小さな街の部品にし、それを組立てて立体写真を作ったり意表を突いたパノラマを作るという凝った作品を産み出すアーティストである。写真というと平面の常識から飛び出し、またデジタル CG 時代に超アナログな多次元作品は、見る者誰もにほほえみをもたらしてくれる。

最後に本年度の東川賞特別賞は、北海道出身で、我が国の女性フォトジャーナリストの先駆者のひとり、吉田ルイ子氏に贈呈される。氏は大学卒業後、放送局にアナウンサーとして勤務するが、写真家に転進、ニューヨークの下町ハーレムに取材した写真作品「ハーレムの熱い日々」を 1972 年に発表し、鮮やかなデビューを果たした。爾来、主に子どもたちの存在の重みと、その生きる権利を熱く擁護する立場から写真活動が続けてきた。そうした活動を 30 年以上にもわたり行ってきた氏は、多くの著名な表現者や識者と親交を結ぶが、そうした人物たち、わけでも同性で熟練の域にある人物のポートレイト集が近作の「華齢な女たち」である。美しく齢を重ね、美意識や知的な内面性の成熟が、いかに人生にとって悦ばしいことかを教えてくれる人像群である。氏のこの持続力と豊かな人間への興味を活かした写真活動に、特別賞を贈呈することとなった。

写真は表現の手段である以前に、社会の現実を共有する手段でもある。今回の選考の経過を振り返っても、時代が時代、社会が社会であるだけに、我々は硬直せずにより柔軟に社会を見つめ、そして痛みや願い、さまざまな思いを共有することの大切さを再認識し、そうした精神に有効な作品が評価を得たと思う。選考の結果は、審査会委員一同からの、ひとつの提案とご理解いただけると幸いである。

東川賞審査会幹事委員 平木 収

第 19 回東川賞《海外作家賞》"The Overseas Photographer Award"



ガイ・ティリム (Guy TILLIM)

南アフリカ共和国 ケープタウン市在住

1962 年 南アフリカ共和国ヨハネスブルグ生まれ、クア・ズール・ナタールで育つ。

1986 年からプロ写真家としての活動を始め、当初は南アフリカの写真家集団アフラピックスに参加し、1990 年まで密接な協力関係にあった。南アフリカ在のフリーランス写真家として地元や海外のメディアと仕事をしており、

1986 ～ 88 年にはロイター通信社、1993 ～ 94 年にはアジャンス・フランス・プレスに籍を置いた。

以来フォトジャーナリズム界で活躍している。

2002 年『魔除けと夢・戦時の若者と変化するアフリカ』を出版、またプレトリア、ダーバン等で同写真展を開催。

2002 年 7 月にアフリカ連合が発足した際に展示された。

世界の写真家 100 人の中から選抜され、2002 年 9 月にハーパー・コリンズが出版する本『アフリカ生活の一日』に掲載されるアフリカの写真を撮ることになった。

南アフリカおよび他国で開催される南アフリカの芸術と写真に関する数多くの展示会でも、ティリム氏の作品は紹介されている。南アフリカ国立ギャラリーは 1990 年、南アフリカのトランスケイに関わる作品選集の制作を依頼した。

2001 年にはアンゴラのクイトを写した作品をテーマにした個展がケープタウンの南アフリカ博物館で開かれ、同個展は SCAM Roger 賞を受賞した際にパリでも行われた。

『出発』と題する写真集および写真展で発表された作品は、ティリム氏独特の美的感覚を示している。氏の写真は厳しい現実を表していることが多いが、取り上げ方が侵略的であったり対立的であることはほとんどない。傾向としては側面から、受身的ではあるが共感を抱いた傍観者として状況を見つめ、非日常的でありながら人間味あふれる瞬間を追及して、心に長くわだかまる不安を画面に与えようとする。

第 19 回東川賞 《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Award"



齋藤 亮一
東京都杉並区在住

第 19 回東川賞 《新人作家賞》 "The New Photographer Award"



糸崎 公朗
東京都国分寺市在住

第 19 回東川賞 《特別作家賞》 "The Special Award"



吉田 ルイ子
東京都世田谷区在住